

5 現代のフロンティア、ヒューストン

5.2 SOM建築設計事務所

ヒューストンの街に着くと、まずアパート探しから始めた。ヨーロッパ旅行で、ほとんど金を使い果たしていたので贅沢なアパートを借りる余裕はなかった。仕事さがしに関しては永住権を持っているし、アメリカの大学院も卒業しているので多少楽観していたが、それでも南部の知らない街での仕事探しは大変だった。しかし、いくつかの設計事務所でインタビューを受けて、2週間程して、最初の仕事を得ることが出来た。ジェームス・シンク・アソシエーツという比較的大きな設計事務所で、サウジアラビアの新しい大きな全大学のキャンパスを設計していた。基本設計は終わり、実施設計図もほぼ完成に近づいていた時期であった。3ヶ月程経って、実施設計図が完成した。完成すると、人員整理があった。多くのスタッフの建築家が解雇された。アメリカではよくあることである。しかし、後から入社した私は解雇されなかった。何だか、何年もその事務所に働いていた人達には、申し訳ない気がした。しかし、もっと暇になれば、私も解雇されるだろうから、私も新しい仕事探しの準備を始めた。SOMで人材を求めているという情報が入った。「SOM」というのは、(S) スキッド・モアと、(O) オーウィングと、(M) メリルという3人の建築家が1940年代に創立した設計事務所である。アメリカ最大手の、つまり世界最大手の、

100階建て、344m、ジョンハンコックタワー、住居・事務所複合ビル、シカゴ、SOM設計、1970年



歴史ある設計事務所で、アメリカのほとんどの大都市には、SOMが設計した超高層のビルが建っている。

私は仕事を探しているという手紙と一緒に、レジメをSOMの事務所に送った。次の週に面接の通知が来た。私は、今まで描いた図面やスケッチ、作品の写真等を持って行き、面接を受けた。今までの私の建築経験について話すと、大分気に入ってくれた。最後に、ヒューストン事務所の最高責任者である、リチャード・キーティングとの面接になった。彼は最も若くして、SOMのゼネラル・パートナーになった、優秀な建築デザイナーである。リチャード・キーティングは、シカゴSOMの大ボスといわれたブルース・グラハムという建築家のもとで働いていた。グラハムは当時、世界一高い超高層ビル、シアーズタワー（110階、442m）やジョンハンコックビル（100階、344m）等をシカゴに設計した。どちらかと



25年間世界一の高さを誇っていたシアーズタワー、事務所ビル、110階建て、442m、シカゴ、SOM設計、1974年、バンドルチューブストラクチャー。（チューブを束にするストラクチャーシステム）。

いうと、構造主義派である。彼は、アグレッシブなキーティングを選んで、このヒューストンに19



すべての図面は手描きであった。パートナー以外は大きな部屋で一緒に働いた。若い世代の我々には結構楽しく働ける環境にあった。SOM デザインスタジオ、設計室、1970-80年代

75年に新しいSOMのオフィスをやるリーダーとして送ったのであった。

そのキーティングは私に訊いた。“いくら欲しいのだ。”SOMで働けるなら、そして超高層建築を設計できるならいくらでもいいとは思った。どれだけ給料がもらえるかは、実力以上に面接の時の心理的なかけひきとなることが多い。相手がどれだけ私を今必要としているかどうか、よみとった上で、自信があったなら、高く要望する方が良い。給料の話が出てくると半分雇われたと理解してもいいと思う。その時、私は予想していた以上の給料をもらうことができた。

戦後、日本の建築界をリードした多くの日本人の建築家達は、アメリカへ現代建築を学ぶに来了。主にアイビーリーグの大学院で学んだ彼らは、その大学院を卒業すると、例えば、SOM や I.M. ペイーや HOK 等の一流の大手の建築設計事務所で、2~3年実務を積み、それから、日本の大手の設計事務所や、ゼネコンにもどり、美しい日本の現代建築を創った。これが、戦後、アメリカに留学した日本の建築家達が歩んだひとつのパターンであった。SOMはシカゴ、ニューヨーク、サンフランシスコの3つの設計事務所から成り立っている。ヒューストンの事務所は、シカゴから独立した事務所である。キーティングは主となる部下達をシカゴの事務所から連れて来ていた。それに、ここの事務所には、テキサス人はもちろん、アメリカ全土から、そしてヨーロッパやアジアからも若い建築家達が集まってきた。日本人は、私1人だけであった。まさに人種の“るつぼ”であった。私は大学院を卒業して間もないといっても、すでに東京、ニューヨーク、ニューヘブン等で実務経験があったので、暫くすると、私は、新しく入ってきた若い人達を、指導する立場につくようになった。多くの若い建築家のタマゴ達は、アメリカの一流の大学院を卒業してきている。彼らは雄弁家で概念や理論を話すことはすぐれており、頭のきれる優秀な人達だ

った。しかし、図面を描いたり、模型を作ったりするのは下手だった。プライドの高い彼ら教えるのは難しかった。それでも私の教え方は、他の人達の教え方と異なっていたので、人気があった。

ヒューストンのオフィスビル。SOM 設計 1977年、型にはまった長方形の大きなフロアプランやユニバーサルスペースと呼ばれる形から抜けだし、沢山のコーナーの個室を作ることを試みた設計のビル。





2つのメジャーテナントが入る、ピルズバリーセンター23階/40階、ミネアポリス、SOM設計
1978年

ピルズバリーセンター、2つのビルの間に来たアトリウム、吹き抜け空間。三角形が段々と落ちてくるようなトッライトのデザイン。その三角形が立体の構造体のトラストになっている。



私は、まずその図面やその模型が、何の為に使われるのかを考えてから、描き、作り始めなければならない、と話した。1本1本の線に意味があること。大事な線は太く描き、大事でない線は細く描く。少なくとも線の太さを4〜5本に分けて、図面を描くこと。エンピツで、線を描き、エンピツを止める時、そして、線が交差する時、の意味についても説明した。平面図であっても立体的に見える様に図面を描かなければならない、とも話した。厚紙での建築の模型の作り方については、次のように教えた。

最初に、厚紙の材質を調べる。その調べ方は、その厚紙を立てて見る。すると、紙の曲がり方で、その紙の繊維がどちらの方向に走っているかが判る。それから模型のかたちを考えてその紙をどういう方向に切るか、特に細長い超高層ビルの模型を作るとき良く考えること。ナイフで厚紙を切る時は、ナイフを押しても、引いてもうまく切れない。上手に切るには、刺身を切る時の様に切ればよい。しかし、刺身を知らない人が多く、それで、私は説明しなした。ナイフで厚紙を切る時は、スライスして切る。つまりサムライが刀で首を切り落とす時の様に、スライスして切れば、切り口がきれいになる、と説明した。それ以来、私は、サムライ・アーキテクトと呼ばれる様になった。アメリカの大きな建築設計事務所は、多くはパートナー・システムになっている。SOMも同様であった。数人のゼネラル・パートナー、アソシエーツ・パートナー、アソシエーツを頂点に、

ピルズバリーセンター、私はアトリウムの設計の担当をした。デザイン、スケッチ、模型作り、デティール、施工図まですべてをした。私はルネッサンスアーキテクトとも呼ばれた。(日本では当然であるが、アメリカの大手の建築事務所で少ない、すべてをやりこなすネッサンス時代のような建築家。)





ゼネラルパートナーのリチャード・キーティングと設計の打ち合わせ。彼は SOM の保守的なデザインの形を破り、繊細であったがワイルドなデザイナー・アーキテクトであった。

各役職の地位を持った所員の、ピラミッド構成になっていた。建築設計部門は、デザイン（基本設計）グループと、プロダクション（実施設計）グループに分けられていた。しかし、その分野を完全に分けられているのではなく、プロジェクト単位のスタ

ジオ・システムになっていた。新しいプロジェクトが入ると、まずデザインチームが構成される。それから、プロジェクトが進行するにつれて、実施設計のグループが構成されるのである。

若い、優秀な新しい社員が入ってくると、彼等にいろいろなことをさせてみて、彼等の才能を調べる。それから、デザインか、プロダクションに振り分ける。

私はデザインチームに属していた。与えられた新しい部下達と話をし、人間の価値感等を話すだけで、この人は将来デザイナーになるか、プロダクションに属するかが分かる気がした。私のチームでは、チーフ・デザイナーと呼ばれるデザインパートナーが作った概念的なスケッチを基に、デザインスケッチ、図面、スタディーの模型等を作ってゆく。模型を作りながら、基本設計を進めていくのである。デザイナーは建築設計事務所では花形、主役である。多くの建築家が、その地位を望んでいる。私はスタッフ・デザイナーから、プロジェクト・デザイナーに昇格され、数人のスタッフと共にプレゼンテーション用の図面や模型を作っていた。

時々、プロダクション・グループの同僚達が、私の所に来て、言った。“クニオはいいな、好きなデザインが出来て”。私は応えて言った。“私はすべてが意図した好きなことをしているわけではない。納得出来ないデザイン・コンセプトの設計を進めていかなければならないことだってある。そういう時は、あなたよりも、もっとフラストレーションが溜まる”。SOMの良いところは、若い建築家を育成する為のプロフェッショナル・ディベロップメントというグループがあることである。これは、各建築分野の勉強会のグループである。ランチタイムの時に、時々いろいろな建築関係の会社のリプレゼンタティブがサンドイッチを持ってきて、レクチャーをしてくれた。又、アーキテクトのライセンス（一級建築士）の受験の勉強会もしていた。一級建築士の試験は、日本でも同じであると思うが、当時は朝から晩まで3日間連続であり、大変難しい試験であった。私の様に英語を得意としない外国人には、特に難しい試験であった。私は皆との勉強会があったからこそ、合格することが出来た様な気がする。又、デザインについてのディスカッションもよくした。一ヶ月か、二ヶ月に一度、現在進行中のプロジェクトについて、ディスカッションをする。このディスカ

ファストフェデラルバンクタワー、ヒューストン、SOM
設計1977年、長方形のフロアプランから抜け出す設計。



サンプリペタワー、事務所ビル、ヒューストン、SOM
設計 1980 年、ポストモダンが始まりだした頃。

セッションには事務所全員のスタッフが集まり、プレゼンテーションをして、ディスカッションをする。

私が担当したオフィスビルのプロジェクトの、プレゼンテーションをした時、若いテキサス人のハードが反論した。“テキサスではこの様な設計はしない！ビルのメインエントランスは、メインストリートに面してしか作らない”といった。彼の親が大きな牧場を持っている、根っからのテキサス人であった。私は主張した。“高層ビルと高層の駐車場が建ち並ぶ時は異なる、車を主として通勤する人達のビルは駐車場からが主のアクセスとなる。メインストリートに面しての入口は形式的なものにすぎず、その様に入口はつくらない方がいい、ただビルの方向性に関しては別問題だ”。彼は“テキサスでは違う”とはっきりと言い張った。このアイデアはチーフデザイナーからの案なので私はそのアイデアを私の役割として主張するしかなかったこともある。どちらも後へ引かず、議論は延々と続いた。皆が見守る中での、テキサスのカウボーイ・アーキテクトとサムライ・アーキテクトとの対決であった。その後、彼とは親友になった。SOMのスタッフは、20代から30代の若い建築家が多かった。そういうこともあって、私はSOMはスクール（建築のプロの大学院）という感じがずっとしていた。各スタッフの、細かい実務評価が半年に一度あった。この実務評価に基づいて給料が上がる。又、仕事の配置換えも行われる。能力が評価されない者は、事務所が少し暇になると、人員整理の対象となる。



1979年SOM年鑑誌からの1ページ、ヒューストンオフィスのスタッフ。

SOM HOUSTON

www.kiparchit.com